慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評リプライ :
Sub Title	
Author	由谷, 裕哉(Yoshitani, Hiroya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.193- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル : 「著者リプライ :」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0193

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評リプライ：

由谷　裕哉

まず、ご多忙の中、『郷土再考』書評のためにお時間を割いて下さった阿南透氏に感謝申し上げたい。とくに、各章の内容にまで立ち入って綿密にコメントを賜ったことは、共著者たちの励みにもなると思う。また、この本を書評にとりあげていただいた三田社会学会にも、御礼を申し述べておきたい。

さて、年の功もあって単著・共著をこれまで少なからず刊行してきた。しかし、今回はとくに計 14 人の共著者がおり、編者として充分な手腕をふるえたのか、自分でも自信がない。

そこで、以下には阿南さんの書評でやや批判的に位置づけられていたと考えられる複数の章について、編者としてリプライをすることから始めたい。

第 5 章は、纏めていただいた通り、「戦後の高尾山の観光開発を京王電鉄の動向に焦点を当てて」分析している。事前の研究会で乾氏の発表を聞いた限りでは、京浜急行と川崎大師、京成電鉄と成田山新勝寺、東武鉄道と日光、池上電気鉄道（後の東急電鉄）と池上本門寺、江ノ島電鉄と江の島・江島神社といった、私鉄の延伸と宗教的な聖地・霊場との関連が主題となるのだと予想していた。ところが、原稿が仕上がってみると、高尾線開通の背景には聖地としての高尾山薬王院に関係する（観光を含む）ニーズだけでなく、八王子市と浅川町との合併、八王子における住宅地の開発など、その他の要因も関係していたことが明記されていた。さらに、開通後も京王帝都側が薬王院の講社設立に寄与していたことや、薬王院が京王電鉄と組んで高尾山での「自然の癒し」（106 頁）を打ち出していることも述べられていた。

つまり、単なる宗教的な聖地と私鉄延伸との関わりではなく、八王子という一地方における様々なアクターの利害が絡み合うことにより、結果として社会資本が整備されたことが本章の主題となったのではないだろうか。

次に第 7 章は、三重県の真宗高田派の村落において、「大般若祈禱など真宗の教義とは相容れない行事が行われている」事例が扱われている。たしかに、「郷土という視角」（148 頁）という語が「唐突に登場する」という評価は、その通りかもしれない。しかし、この事例について事前に亀崎氏のプレゼンを聞いた時から、私はこの事例の独自性に惹きつけられたのである。

どうやら、大般若の起源伝承で参照される宝幢院という現在廃寺となっている曹洞宗寺院が、かつて藩主の祈願寺であり、宝幢院で大般若経法会が行われていた際には、「無足人」と呼ばれた郷士（144 頁）が関与していたらしい。この郷士について、それが本事例の中でどのような位置にあったのかは史料的に追跡できないのかもしれないが、ともあれ亀崎氏は、それを藩の支配組織の末端に組み入れられた、特権階級と解釈している（145 頁）。そのうえで、この事例で大般若が持続してきたのは、村人の真宗門徒としてのアイデンティティとは別に、こうした

由谷裕哉「書評リプライ」
『三田社会学』第 18 号（2013 年 7 月）193-195 頁

特権階級への帰属意識も存在し、法会が村によって担われることになってもそれが彼らのアイデンティティとして存続した、と考えている模様である。北陸の真宗村落を調査した私自身の経験と比較して、大変興味深い事例だと思っている。

各章についてのリプライはこれ位にして、次に「本書ではそれぞれの著者が地域とどのように関わってきたのか、本文中にはほとんど言及がない」と指摘されたことについて。本書の作成に関しては、共著予定者が決まり、初顔合わせを行おうとしていた矢先に東日本大震災が起こった。この未曾有の震災については、「あとがき」で若干触れ、同じ年の 7 月に下越を襲った集中豪雨が第 8 章で取り上げられたり、第 13 章の末尾で補足的に 2007 年の能登半島地震を想起した以外に、残念ながら本書の中で本格的な議論はない。とはいえ、震災による紙の供給不安を背景に、価格を抑える為に版元から字数厳守が厳しく要求され、そのせいか、ヴェテランの執筆者でも指定紙数の中で充分に論旨が展開できなかったのでは、と編者が感じた章もあった（第 3 章、第 11 章など）。

たしかに、「著者自身の地域との関わりや当事者性」などについて、「例えば巻末の執筆者一覧で述べるなどの工夫があっても良かったのでないか」とのご指摘はその通りなのだが、3.11 以後の数ヶ月の中でそうしたアイディアは到底思い浮かばなかった、としか言いようがない。なお、大震災との関わりということでは、元々本書は 15 人の共著者で企画がスタートしたものの、仙台市在住の一人が（直接罹災したわけではなかったのだが）原稿を落としたことにより、今の 14 章スタイルになった経緯がある。ともあれ、本書を制作していた 2011 年は、本作りに向けての会合を催したり、学会などの場で共著者と会って相談したりする度に、何らかの天災に遭遇したこと（3 月に予定していた初顔合わせが延期されたり、7 月の集中豪雨で上京できなくなったり、9 月にも台風がちょうど学会開催中の近畿地方を直撃したり、など）を、編者として忘れることができない。

その編者としての責務であるが、「郷土」というキーワードを立ててうまく概念規定ができ、それが共著者全員に滞りなく伝えられたか、我ながら心許ないところがある。その辺りについて阿南さんから、「当事者の観点を含む『フィールドからの視点』を描きだした点で、一定の成果を挙げたと見ることができる」という言辞を賜ったことは、大変ありがたいと思っている。

もとより、単著であれ編著であれ商業出版を行う場合、本として纏める意義を版元に説明することから始まって、何を読者（マーケット）に訴えるべきなのかは、きわめて難しい。

最近は、理系のように人文社会系の学術雑誌も、（本誌を含めて）掲載論文を pdf ファイルの形でインターネット上に公開する傾向が進んでおり、かつてのように学術雑誌への投稿が学者共同体に向けてのもので、本としての出版のみが一般社会に向けたメッセージ、という区分は解消されつつある。しかし、社会科学系の研究者は社会（フィールド）を研究対象にしている限り、その成果を社会に還元する使命があると私は考えており、もしかするともう古い世代に属する思い込みなのかもしれないが、その為には学術雑誌への寄稿（だけ）ではなく、書籍の出版を行うべきではないか、という思いがある。

本書は、上述のように大震災後の鬱屈した世相の中で編まれた書物だという側面を有しているが、今後もそうした社会の荒波に翻弄される非力な存在でありながらも、私は著作を上梓し続けたいと思っている次第である。

（よしたに　ひろや　小松短期大学教授）